真宗大谷派岐阜高山教区

岐阜同朋 ぎふどうぼう

2023.01 128

- 同朋会運動とは何か？～藤井慈等先生に聞く～Part3
- 竹鼻別院人生講座特別企画
  心に響くメロディー ～ピアノとソプラノで綴る秋の調べ～
- 同朋の会ノスヽメ 笠松別院 かさほサロン
- My Book

人生講座特別企画「心に響くメロディー ～ピアノとソプラノで綴る秋の調べ～」 竹鼻別院

同朋会運動とは何か？

Part3 最終回

～藤井慈等先生に聞く～

お聞きしたいことがあります。この「同朋」という言葉を確かめ切れてないと自分で思っていて、先輩に聞くと、それは真宗門徒のことだとか、一緒に生きて行く仲間だということを教えていただいたことがあるんですが、それでは腑に落ちなくて、念仏は真宗門徒にだけ響くものじゃなくて全人類に響くということがあると思います。何をもって同朋というのか自分の中にはっきりしないのでお尋ねしたいと思います。（高田）

藤井慈等先生　宗門において、同朋という言葉が使われだしたのは、やはり同朋会運動からだと思います。「真宗同朋会とは、純粋なる信仰運動である」（昭和37年『真宗』誌）とありますように、当時の宗務総長演説を見ましても「真宗同朋会」とあって、運動という言葉はないのですね。ただ「純粋なる信仰運動」をめざしていく中で、第一次同朋会運動とか第二次同朋会運動とかと、同朋という言葉が定着していくわけです。

何故、「同朋」だったのか、これは大事な課題だと思います。

親鸞聖人の『教行信証』には同朋という言葉は出てなくて、門徒という言葉が出てきます。いわゆる「後序」ですが、親鸞聖人は法然上人と共に流罪になる、いわゆる法難の事件が記述されています。ここのところで「真宗興隆の大祖源空法師、ならびに門徒数輩、罪科を考えず、猥りがわしく死罪に坐す」と、法然上人の門徒という使い方が注目されます。今風に言えば、法然聖人の教えを聞く生徒ですね。その生徒が、死罪にされるという、恐ろしいというか怖い状況の中に置かれる「門徒」なんですね。その基づくところは、「ただ念仏」であるということが教えられています。

その意味で言いますと、今ほどご紹介しました「純粋なる信仰運動である」という言葉に続いて、「従来単に門徒と称していただけのものが」とありますが、むしろ「門徒」という言葉の重さみたいなものを、聞き取ると言うことが大事な課題であるのではないかと思います。

蓮如上人では、『御文』の一帖目一通ですね、門徒という言葉が出てきます。そのあとに親鸞聖人が「御同朋・御同行とかしずかれた」という言葉が引かれています。「門徒同朋」という言葉もありますが、このよりどころは親鸞聖人のご消息の中の「ともの同朋にもねんごろのこころのおわしあわばこそ」というこの言葉が思われます。流罪の前と後で同朋の内容が違ってきますね。

『歎異抄』では、「親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり」「勢観房、念仏房なんどもうす御同朋達、もってのほかあらそいたまいて」と、よく知られています

「源空が信心も、善信房の信心も如来よりたまわりたる

信心なり」という物語のところで使われています。ここでは、源空つまり法然上人のお弟子達という意味で、同朋なんですね。吉水教団は、色んな階層の人もあったでしょうが、ある意味で仲間社会なんですね。親鸞も居心地良かったといわれた先生もいらっしゃいます。そこから辺鄙の群類の地に流されるわけですわね。

「いなかのひとびとの、文字のこころもしらず、あさましきぐちきわまりなき」という添え書きのある『唯信鈔文意』には、よく取り上げられますが「具縛の凡愚、屠沽の下類」とあって、下類とされた人を「りょうし（漁師）・あき人（註：商人）とよばれていたことが分かります。また、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」ともありますから、吉水教団の同朋とは意味合いの違うものを感じます。

話しはすこし現代に戻りますが、解放同盟からの糾弾（第6回）で米田富さんが「私は勿体ないけど同行と思わせてもらってます。したがって、弟子はおるけど同行のおらん本願寺みたいなものには一遍も来たことはない」と指弾されますが、この言葉の元は、水平社が生まれて募財拒否をします、その時に部落内の門徒衆に呼びかけられます檄文です。そこに「沓造も非人も何の差別もなく御同行御同朋と抱き合ってくださる」「この御開山が私共の御同行です、私共はこの御開山の御同朋です」とあります。ですから、同朋会運動の50年前に「同朋」という言葉が、水平社運動の中で使われているんです。

それが米田富さんの中から吹き出したあの糾弾の言葉なのです。

安田理深先生が、かつて「本願においていかなる凡夫といえども当来の仏として尊敬される。これを人権という」（『正信偈』講義）と、お話されているそのような言葉が、同朋という言葉を課題にしていく視座になるのではないかと思います。

そこから考えますと、如何なる凡夫といえども老若貴賤男女問わず、生きんとする意欲を抱えている。その意欲が超え出てこないと、超發してこないと、やはりそれは眠ったものになるんでしょうね。そういうものを自覚する出遇い、先に出遇った人に出遇って宗教心が芽を出してくる。

親鸞聖人が『歎異抄』二章で、はるばる訪ねて来られた人に「御こころざしひとえに往生極楽の道をといきかんがためなりけり」と仰っている。「御こころざし」、こころざしに御の字を使っておられる。来られた人の宗教心、菩提心を尊敬している言葉ですよね。ああいうところに親鸞聖人にとっての御同朋という姿勢が教えられますね。

九章では「親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊同じこころにてありけり」と。問いのところで交わっていくんです。答えでなくてね。「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」こういう言葉、「われらがためなりけり」こういう「われら」が「同朋」なんですよね。だから同朋会運動、同朋運動というのはそういう宗教心が生み出すつながりというものではないですかね。いのちの問いにおいて何かわれらの世界が開かれるというような、そういうことが『歎異抄』に表されていますね。

だからなぜ純粋な信仰運動に「同朋」という言葉を使い出したのか。同朋会運動の「同朋」ということにもっとこだわっていかれればいいんじゃないでしょうか。

〈了〉

（聞き手：五辻　元／髙田　信）

心に響くメロディー
～ピアノとソプラノで綴る秋の調べ～

中秋の名月に照らされる秋の夕暮れ、心に響く歌と演奏が本堂に流れました。

竹鼻別院では「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」というテーマのもと、年に10回、朝の6時から人生講座が行われています。その特別企画として「心に響くメロディー ～ピアノとソプラノで綴る秋の調べ～」と題したコンサートが2022年9月10日(土)に行われました。

人生講座は長年続けられてきましたが、一時期、参加者が固定し人数も減ってくるという状況にあったそうです。そんな中、若い世代の人にも真宗の魅力を伝えたいという願いから、音楽を通してお念仏の響きを聞くコンサートが企画され恒例となりました。

新型コロナウイルス感染の影響で、一昨年、昨年は中止となり、今回が3年ぶりの開催となりました。

当日は、人生講座スタッフの方と院議会議員のご門徒さんが当日のスタッフとして関わられ、日ごろ人生講座にお越しになられている方や音楽に興味がある方、羽島地域にお住いの方など、約120名の方が参加されました。

ピアノの演奏は清澤久恵さん、愛知県碧南市にある大谷派のお寺のお生まれです。蓮如上人五百回御遠忌の際には、テーマソング「バラバラでいっしょ」を、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要では「今、いのちに目覚めるとき」などを作曲されました。また、ソプラノ歌唱は安藤風季さん、各務ヶ原市ご出身で、加納高等学校音楽科、愛知県立芸術大学音楽部を卒業された後、国内で様々な賞を受賞され、海外での音楽芸術フェスティバルにも参加されているソプラノ歌手です。

コンサートは秋の童謡メドレーに始まり、十五夜にちなんで「月」にまつわる曲、御遠忌テーマソング「今、いのちに目覚めるとき」、2023年に行われる、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗八百年慶讃法要テーマソング「あなたの声」などが披露されました。

別院の本堂という場に素敵なピアノの演奏と歌声が響き渡り、参加された方はうっとりと曲に聴き入っておられました。

スタッフとして関わられたご門徒さんは、「コロナの影響がある中でも、多くの方にご参加いただきました。お二人の演奏、懐かしの童謡に合わせ、みなさんも口ずさむ姿がありました。皆さまと貴重な時間をともにすごせたことをありがたく思います」

「スタッフで受付をしながらしか聴くことは出来ませんでしたが、仏教の教えを、歌と演奏で表現していただいたと思います」と感想を述べられました。

初秋の夕暮れのひととき、心地よい風にのって音と言葉が流れていました。ここに来られたお一人おひとりにそれぞれの人生があります。昼間には、様々なことが起こり、喜んだり傷ついたりして落ち着かない時間を過ごされた方もおられるでしょう。

一人ひとりの人生を見守るご本尊阿弥陀様のお心を感じ癒されながら、大切な時と場をいただきました。

翌11日(日)には、第427回人生講座が行われ、清澤久恵さんから演奏を交えてお話をされました。ご自身がお寺に生まれ教えに触れ、お父さんの影響で音楽に関わってこられたことなど静かに語ってくださいました。

参加者の中には、10日のコンサートに続けて参加された方もおられ、熱心に耳を傾けておられました。

笠松別院

「同朋（どうぼう）の会」ノススメ

かさほサロン

今回ご紹介するのは、「かさほサロン」です。「同朋の会」の名称で行われているものではありませんが、地域に開かれた出遇いの場ということで取り上げさせていただきました。

サロンは毎月第3水曜日、基本的に笠松保育園の遊戯室を会場に行われています。新型コロナウイルス感染予防のため長らく休止状態でしたが、伺った今回が、久しぶりの開催となりました。

今年で9年目を迎えるかさほサロンは、笠松別院近所にお住いで当時民生委員をしておられた勅使川原久貴子さんの「一人暮らしのお年寄りも多いので、そういう人が集まれる場があってお一人おひとりの顔が見られたら」という思いと、「地域の人とのつながりをもてないか」という別院の思いが一つになり、笠松別院・保育園・笠松町社会福祉協議会（地域包括支援センター）が連携をする形で始まりました。

開催に当たっては近所にチラシを配るなどして呼びかけ、平均20名ほどの方が参加されるようになりました。

通常、会は10時から始まり、お昼前まで行われます。クイズやかるたをしたり、園児たちの歌を聴いたり一緒に歌ったりして過ごします。

また、別院では春と秋の永代経（彼岸会）、11月は報恩講が勤まるので法要にお参りいただき、その後保育園に移り、法話を聞いていっしょに時間を過ごします。

参加されている方からは「お彼岸や報恩講では、サロンの方もどうぞと誘っていただき、お参りしやすくそこで仏事に触れられるのがいいです」「家にお仏壇はありませんが、ここでお参りすると、仏事に関することをとても身近に感じ、自分のところで何かあったときのためにも少しでも来たいと思っています」「法話が好きで聞

きたいと思ってきています。門徒ではないのですが、地域のお寺さんというところ（会場）でやれるのが嬉しい。コロナ禍で、園児と関われないのがさみしい」といった声が聞かれました。

代表の勅使川原さんは「遊びやリクレーションもそうですが、報恩講でおときを食べたりと、そういう事での関わりも理想的だと思っています。お寺（別院）と保育園、スタッフ（社会福祉協議会・包括支援センター）とで年間計画を立てますが、本堂（仮御堂）も地域の人が集まれる場となればいいと思います。引っ越ししてきた若い人たちにも声をかけ、広げていければ嬉しい。たとえ一人でも来て下さるうちは、続けてやっていきたい。」と語ってくださいました。

また、笠松別院輪番兼笠松保育園園長の澁谷由美さんは「別院を元気にしようと始まったと聞いています。今後は、別院の仮御堂の広さの問題もありますが、保育園の子どもとサロンの参加者の方々がいっしょに報恩講にお参りいただければ」と話されました。

お寺という場で、地域の人同士が、また、お年寄りと子どもが出遇う。関わる方々の力強さとその願いに触れ、人が孤独に陥っている現代にこのような場が開かれていることの大切さを実感しました。

「かさほサロンの七夕かざるよ!」「僕にもできるかな～」
保育士も一緒にお手伝い。お友達も一緒に見守ります。

「笹竹私が持ってあげるね!」「お手伝いありがとう!」笹飾りが
付けやすいように子ども達がお手伝い。可愛い飾りに子ども
達もおもわず、「きれいだね～」

「この飾り、どうやって作るの?」子ども達の問いかけに「これはね～こうして～こうやって」と
優しく教えてくれました。子ども達も真剣な表情で見つめます。

※写真はコロナ以前に撮られたものです。

MyBook

悩みの正体 念仏メソッドを通して

瀧 義範　文芸社 ¥1,540（Kindle版有り）

楽しく煩悩を見つめる

この本の中で著者は、「煩悩と真摯に向き合った親鸞ほど、清く正しく生きようと願った僧侶はいません」と記されています。

これは唯識の大家である横山紘一先生に学ばれた中から、新しい親鸞像として出てきた言葉であると思います。真宗の教えは安易に煩悩を肯定してしまう教えではありません。

太田久紀先生もマナ識について「いいことをしたり、仏道に適っていると思うことをしている時も、マナ識は非常に深いところで執拗に働き続けている」と述べられており、自分では認識していない深い煩悩にまで、親鸞はメスを入れていると言えます。これは驚くべき厳しい姿勢です。

真宗はマナ識という言葉を使わなくても、それを機の深信で表現して、阿弥陀仏の法に包まれているからこそ、素直に気づかない煩悩にまで目が届くのです。

14項目ある「念仏メソッド」（55～57頁）を通して、深い気づかない煩悩まで楽しく見つめていきましょう。

編集後記

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』という物語がある。誰しも、一度は聞いたり読んだりした事があるのではないだろうか。血の池地獄に堕とされた泥棒・カンダタがお釈迦様の気まぐれから、生前助けた蜘蛛を縁として、糸を伝い地獄からの脱出を試みる話だ。最終的に、欲をかいたカンダタは脱出できずに地獄へ再び落ちていくわけだが、私はこの話が子どもの頃から理不尽に感じてならない。頼りない細糸に自分以外もぶら下がろうとするのだから、カンダタの怒りはもっともで、他の亡者に降りて欲しいと思うのが人情だ。そんな事を考えたのは、当然私だけではなかったようで、この『蜘蛛の糸』、『日本沈没』で有名な小松左京がカンダタが糸を登り切るifをショートショートで書いている。

小松左京版の『蜘蛛の糸』では、カンダタは追従する亡者の姿を見て、降りろと怒鳴るのではなく、糸が切れる前に登りきらねばと、一目散に極楽を目指した。それを見たお釈迦様は亡者まで上がってきてはかなわんと、カンダタ一人を引き揚げるために身を乗り出すが、はずみで真っ逆さまに地獄へ落ちてしまう。

かくして極楽へと登りきったカンダタと亡者たちは、極楽で穏やかに暮らし、いつしかそれぞれが仏様のように穏やかになった。ある日カンダタが地獄を覗き込むと血の池地獄で苦しむお釈迦様の姿が見えた。かつての恩を思い出し、同じようにお釈迦様を助けるべく、カンダタは蜘蛛の糸を垂らす。

かつてのカンダタのように糸を伝うお釈迦様。しかし、その後ろには地獄の獄卒に、閻魔様までついてきている。それを見たお釈迦様は「お前たちまで極楽に来てはいかん。」と叱りつけるが、途端に糸はプツリと切れ、お釈迦様は真っ逆さま。といった物語だ。

地獄の亡者も極楽に在れば、仏の如くなり、お釈迦様であれ、地獄に在れば他者を蹴落とす。悪い人間が悪事をするのでも、清廉潔白な人だけが良い行いをするのでもない。縁がもよおせば誰しも悪事も善行もするのだろう。

TVを見れば日々、大小様々な悪いニュースが流れる。それらを見ながら皆、悪事を犯した人を指差し人非人の如く罵るが、そんな我が身も清らかな蓮池から血の池地獄に転がり落ちれば同じように悪を成す。そんな視野が欠けている現代の私たちには小松版の少しアイロニーの効いた蜘蛛の糸が丁度良いのかもしれない。（山）

発行・編集：岐阜地区出版委員会　真宗大谷派岐阜高山教務所　海老原 章　〒500-8054 岐阜市大門町1　TEL.058-266-1378